

第42回メディコピア教育講演シンポジウム



ウイルスを知る

滝川 一 矢富 裕 深川 雅史



開催日：2022年1月16日（日）

会 場：東京国際フォーラム（有楽町駅前）

HU H.U.GROUP

HU H.U.フロンティア

SIRIL
Communication for Health

FUJIREBIO

NS Nihon Stery

ウイルスを知る

10:00～10:05 はじめの言葉

滝川 一 (帝京大学医療技術学部長)
医学部名誉教授
内科客員教授

午前の部 10:05～12:30

「ウイルス感染症の現状と問題点」

10:05	司会の言葉	矢富 裕 (東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻) 臨床病態検査医学 教授
10:10	ヒトに病気を起こすウイルス	四柳 宏 (東京大学医科学研究所 先端医療研究センター) 感染症分野 教授
10:35	臨床検査における ウイルス検査法の実際	長尾 美紀 (京都大学大学院医学研究科 臨床病態検査学 教授)
11:00	ヒトパピローマウイルス(HPV)と 発がん	川名 敬 (日本大学 医学部産婦人科学系) 産婦人科学分野 主任教授
11:25	コロナ禍で進むワクチン開発 研究の破壊的イノベーション	石井 健 (東京大学医科学研究所 感染・免疫部門) ワクチン科学分野 教授
11:50	総合討論(40分)	

午後の部 14:00～16:30

「話題のウイルス感染症」

14:00	司会の言葉	深川 雅史 (東海大学医学部 内科学系 腎内分泌代謝内科 教授)
14:05	小児領域における 新興・再興ウイルス感染症	齋藤 昭彦 (新潟大学大学院医歯学総合研究科) 小児科学分野 教授
14:30	成人の呼吸器ウイルス感染症 ～インフルエンザを中心に	石田 直 (倉敷中央病院 呼吸器内科 主任部長/副院長)
14:55	新型コロナウイルス感染症 COVID-19とは	大曲 貴夫 (国立国際医療研究センター 国際感染症センター センター長)
15:20	特別発言「コロナに感染して変わった事 ～悪い事ばかりじゃない!??～」	パパイヤ鈴木 (振付師、タレント)
15:45	総合討論(40分)	
16:25～16:30	おわりの言葉	滝川 一

はじめの言葉



帝京大学医療技術学部長
医学部名誉教授
内科客員教授

タキカワ ハジメ
滝川 一



主な研究領域

内科学、消化器病学

主な著書

編集「消化器ナビゲーター」、「ここまできた肝の科学」、「講義録 消化器学」など

1977年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院内科研修医
1979年 東京警察病院消化器センター内科
1980年 東京大学医学部第二内科医員
1984年 米国UCLA客員研究員
1987年 東京大学医学部第二内科助手
日本赤十字社医療センター第一消化器科
帝京大学医学部第一内科講師
1990年 帝京大学医学部第一内科助教授
1998年 帝京大学医学部内科教授
2010年 帝京大学医学部附属病院副院長（併任～2013年）
2011年 帝京大学医学部内科主任教授
2013年 帝京大学医学部長（併任～2018年）
2018年 帝京大学医療技術学部長
帝京大学医学部名誉教授
帝京大学医学部内科客員教授

医学・医療のタイムリーな問題・話題に関して、我が国の最先端研究者により、広い視点から、わかりやすい講演・議論をいただいているメディコピア教育講演シンポジウムは今回で42回を迎える。幸いにも好評を博し、盛会を続けているが、昨年の本会はコロナ渦でインターネットライブ配信による開催を余儀なくされた。今回のテーマとして、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を取り上げて欲しいとのご意見が最も多かったが、テーマを決める時点で2022年の1月のCOVID-19の状況が予測出来ないことから、ウイルス感染症全体を取り上げることにした。テーマは「ウイルスを知る」とし、四柳 宏教授（東京大学）のご指導もいただき、プログラムを構成させていただいた。

ウイルスは遺伝子とそれを包むタンパク質の殻で出来ており、細菌の様に単独で増えることはできず、ヒトや動物などの宿主の細胞に入り込み、その機能を流用して増殖する。感冒をはじめとする様々な疾患を引き起こし、今回のCOVID-19のようにパンデミックとなり、社会に多大な影響を与える場合もある。

今回、ウイルス感染症に係わる臨床、研究、予防の面で、我が国の指導的立場におられる方々を講師としてお招きし、わかりやすい内容のご講演、ご論議を展開いただけることはたいへん意義深いと考える。本シンポジウムにより、改めて、ウイルス感染症に関する最新かつ正しい理解を深めていただけると期待している。

司会の言葉



東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻
臨床病態検査医学 教授

ヤトミ ユタカ
矢富 裕



主な研究領域

臨床検査医学、血液内科学、血栓止血学、生理活性脂質

主な著書

編著

「臨床検査法提要」(金原出版)
「今日の臨床検査」(南江堂)
「標準臨床検査学」(医学書院)
「血液形態アトラス」(医学書院)
「臨床検査値判読ハンドブック」(南江堂)
「出血性疾患の実践診療マニュアル」(南江堂)
「健康診断と検査がすべてわかる本」(時事通信社) など

1983年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院内科
1984年 東京日立病院内科
1986年 東京大学医学部附属病院第一内科
1991年 山梨医科大学医学部臨床検査医学助手
1997年 山梨医科大学医学部臨床検査医学助教授
2003年 東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学助教授
同医学部附属病院検査部副部長
2005年 東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学教授
同医学部附属病院検査部部長
2008年 東京大学総長補佐(兼務)(2010年まで)
2011年 東京大学大学院医学系研究科副研究科長、医学部副学部長(兼務)(2019年まで)
2017年 東京大学教育研究評議員(兼務)(2019年まで)
2019年 東京大学医学部附属病院副病院長(兼務)

人類の歴史は感染症との闘いの歴史であったと言われる。感染症の原因となる病原体の中でのウイルスの位置づけに関しては講演の中での説明に譲るとして、人類は、これまでも、より良い診断法の開発、ワクチンや治療薬の開発により、多くの怖いウイルス感染症を克服してきた。しかし、21世紀に入っても、いくつかの新たなウイルス感染症(新興感染症)が世界各地で発生していたところ、今回、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の脅威にさらされることとなった。

今回のCOVID-19への対応でも明らかになったが、行政主導の感染対策、診断薬と治療薬・ワクチンの開発とともに、一般の方々が、直面するウイルス感染症に関する正しい知識を持つことがきわめて重要である。

本シンポジウムの前半の部では、ウイルス感染症を横断的に俯瞰するが、ウイルスに関する基本的知識、検査法、発がんとの関連、ワクチン等に関するの最新情報をお届けさせていただく。

例年通り、テーマに関して我が国のトップ・リーダーの先生方に、わかりやすい内容のご講演をお願いした。インターネットからも膨大な医療情報が入手できるが、中には、鵜呑みにできない情報も含まれており、今回のCOVID-19に関しても例外ではない。本シンポジウムにご参加いただく皆様方には、是非、ウイルス感染症に関する正しい理解を深めていただきたい。

ヒトに病気を起こす ウイルス



東京大学医科学研究所 先端医療研究センター
感染症分野 教授

ヨツヤナギヒロシ
四柳 宏



主な研究領域

感染症内科学（主としてウイルス性疾患）、感染制御学、肝臓病学、消化器病学

主な著書

監修

「ウイルス肝炎感染防止ガイドライン」（協和企画）

共著

「C型肝炎最前線 [新世代のDAAをどう使うか・IFNの使い方はどう変わるか]」（日本医事新報社）

「予防接種の現場で困らない まるわかりワクチンQ&A」（日本医事新報社）

1986年 東京大学 医学部医学科卒業
1988年 東京大学医学部第一内科入局
1993年 東京大学医学部第一内科助手
1998年 聖マリアンナ医科大学内科学講師
2004年 東京大学医学部附属病院感染制御部講師
2008年 東京大学医学部感染症内科准教授
2016年 東京大学医科学研究所先端医療センター感染症分野教授
2018年 東京大学医科学研究所附属病院副病院長
2021年 東京大学医科学研究所附属病院病院長
現在に至る

ウイルスは動物・植物の細胞に侵入し、細胞内で増殖する微生物である。他の生物に寄生しないと増殖できない点が細菌とは異なっている。

新型コロナウイルスについて考えてみよう。このウイルスは鼻・喉・気管支など呼吸器粘膜細胞の表面にある受容体に結合し細胞内で増殖する。増殖したウイルスは隣接する細胞に感染し、細胞を破壊していく。その結果嗅覚異常、咳・痰などが生じる。肺に広がると肺炎を起こす。

ウイルスに細胞が感染すると白血球がその場に動員され、炎症反応が起きる。発熱・全身のだるさなどが引き起こされる。

呼吸器の粘膜細胞から侵入するウイルスにはインフルエンザウイルス、麻疹ウイルス、風疹ウイルスなど様々なウイルスがある。麻疹ウイルス、風疹ウイルスはそれぞれ特有の発疹がみられる病気である。このように病気の症状・所見は必ずしもウイルスの侵入部に限らない。

新型コロナウイルスのように呼吸器から侵入するウイルスから身を守るのは容易なことではない。現在はすべての人がマスクをすることでこうした呼吸器感染症がかなり防げているがマスク着用をずっと続けるわけにはいかない。ワクチン接種による防御が望まれることになる。

呼吸器のほかにも消化器・神経・生殖器などから侵入するウイルスがいろいろとある。本講演ではその代表的なものを紹介しながら“ヒトに病気を起こすウイルス・ワールド”を見て頂こうと思う。

臨床検査における ウイルス検査法の実際



京都大学大学院医学研究科
臨床病態検査学 教授

ナガオ ミキ
長尾 美紀



主な研究領域

臨床検査医学、臨床微生物学、感染制御学

1999年 名古屋大学医学部卒業
市中病院で臨床研修のち呼吸器内科勤務
2006年 京都大学医学部附属病院検査部・感染制御部医員
2009年 同助教
2011年 同講師
2015年 同准教授
2019年 現職

ウイルスを知る

ウイルス感染症の検査法には、大きく分けて①ウイルスそのものを検出する方法と②ウイルスに対するヒト側の免疫反応（主に抗体）を計測する方法がある。ウイルス感染症を診断するためには、基本的には前者の手段を用いるべきであるが、後者もその性質を理解したうえで用いれば、目的に応じた有用な検査となる。

ウイルスそのものを検出する手段としては、電子顕微鏡によるウイルスの直接的な観察と細胞培養によるウイルス分離同定が基本となるが、日常検査の一環として行うには技術や時間を要する。そこで臨床現場では、ウイルスの一部を検出するPCR法などの遺伝子検査や抗原検査が活用されている。また、ウイルス感染症に対するヒト側の生体反応をみる抗体検査法は、それぞれの抗体の体内動態を考慮の上、(1)ベア血清の測定による感染症診断、(2)ワクチン接種後に防御能がある抗体を獲得できているかを確認する場合に行われる。

COVID-19パンデミックにより、ウイルス検査が世間の耳目を集めることになった。本講演では、新型コロナウイルスをはじめとした代表的なウイルス感染症の検査の実際と、次なる新興感染症も念頭においた今後の展望についてお話したい。

ヒトパピローマウイルス (HPV) と発がん



日本大学 医学部産婦人科学系
産婦人科学分野 主任教授

カワ ナ ケイ
川名 敬



主な研究領域

婦人科腫瘍学、産婦人科感染症、ワクチン学

主な著書

- 1) 「悪性腫瘍（産科婦人科腫瘍 5）1章 子宮頸癌 分子生物学の進歩」（中山出版）
- 2) 「再発卵巣癌・卵管癌・腹膜癌、卵巣がん・卵管癌・腹膜癌治療ガイドライン2020年版」（金原出版）
- 3) 「婦人科腫瘍治療アップデート、トランスレーションリサーチ-HPVを標的としたCIN治療薬の創薬開発の現状、167-177」（中外医学社）
- 4) 「まるわかりワクチンQ&A 3版、10. 子宮頸癌」（日本医事新報社）

- 1993年 東北大学医学部医学科卒業
東京大学医学部産科婦人科学研修医、同医員
- 1996年 厚生労働省ヒューマンサイエンス振興財団リサーチフェロー（国立感染症研究所にて、HPV研究を開始）
- 1998年 東京大学医学部産科婦人科学助手
- 1999年 埼玉県立がんセンター婦人科医員
- 2000年 東京大学医学部産科婦人科学助手
- 2001年 学位（医学博士）取得（東京大学）
- 2003年 米国ハーバード大学（Brigham & Women's Hospital）産婦人科リサーチフェロー
- 2005年 東京大学医学部産科婦人科学助教
- 2011年 東京大学医学部産科婦人科学講師
- 2013年 東京大学大学院医学系研究科生殖発達加齢医学専攻産婦人科学講座准教授
- 2016年 日本大学医学部産婦人科学系産婦人科学分野主任教授
- 2020年 日本大学医学部附属板橋病院副病院長
- 2021年 日本大学医学部附属板橋病院病院長補佐

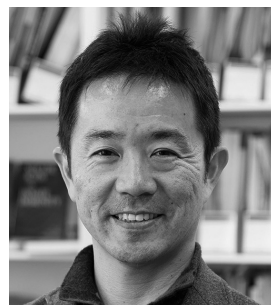
ヒトのがんで微生物が病因に関わるがんには、肝臓がんの肝炎ウイルス、胃がんがピロリ菌、上咽頭がんのEBウイルス、そしてヒトパピローマウイルス（HPV）のHPV関連がんがあげられる。HPV関連がんの中で、子宮頸がんは最も患者数が多く、かつ若年発症のがんである。HPVの寄与率は、子宮頸がん（95%）を筆頭に、肛門がん（90%）、中咽頭がん（60%）、腔がん（50%）、外陰がん（50%）、陰茎がん（30%）となっている。これら以外にも口腔がん、肺がん、膀胱がんなどもHPVとの関連性は指摘されている。HPVは、性行為によって感染し、多くの男女が感染しているありふれたウイルスである。HPV感染からがんまで進展するのはごく一部であるが、HPV関連がんの必要条件になっていることから、HPV感染を予防するHPVワクチンはがん予防の観点から期待が大きい。また、我々はHPVを標的にした前がん病変の創薬を行っている。ウイルス感染予防やウイルス治療薬ががん予防になるところがウイルスとがんの最大の特徴であり、本講演ではその点を紹介したい。

コロナ禍で進むワクチン開発 研究の破壊的イノベーション



東京大学医科学研究所 感染・免疫部門
ワクチン科学分野 教授

イシイ ケン
石井 健



主な研究領域

ワクチン学、免疫学、微生物学、レギュラトリー
サイエンス、グローバルヘルス

主な著書

監修：石井健、山西弘一「アジュバント開発
研究の新展開」(シーエムシー出版)

監修：石井健「次世代アジュバント開発のた
めのメカニズム解明と安全性評価」(シーエム
シー出版)

Ishii KJ and Akira S. (Editor) 「Nucleic Acids
in Innate Immunity」(CRC press)

Ishii KJ and Tang CK (Editor) 「Biological
DNA Sensor: The Impact of Nucleic Acids on
Diseases and Vaccinology」(ELSEVIER)

平成5年横浜市立大学医学部卒業。3年半の臨床
経験を経て米国FDA・CBERにて7年間ワクチン
の基礎研究、臨床試験審査を務める。平成15年
帰国しJST・ERATO審良自然免疫プロジェクト
のグループリーダー、大阪大学・微生物病研究所・
准教授を経て、平成22年より平成30年まで医薬
基盤健康栄養研究所アジュバント開発プロジェ
クトリーダー、ワクチンアジュバント研究セン
ター長、平成22年より現在まで大阪大学・免疫
学フロンティア研究センター教授。平成27年よ
り平成29年まで日本医療研究開発機構 (AMED)
に戦略推進部長として出向、平成29年より平成
31年まで科学技術顧問を務める。平成31年より
現職。

コロナ禍で起きた、そしてまだ音を立てて進んでいるワクチン開発研究の破壊的イノベーションは、コロナ禍以前には「ワクチンといえば専ら予防接種、感染症分野のことでしょう」、「(ワクチンは) 先端科学、技術というほどのものではないでしょう」といった日本の一部のアカデミア、産業、行政、世論の認識を完全に過去に葬り去った。実際のところは、20年ほど前からワクチン開発研究に地殻変動はとうに始まっていて、欧米では医薬品開発において温故知新の革新的モダリティとして再認識され、mRNAやDNAだけではなく、ウイルスベクター、組み換えタンパク、VLP、ペプチド、アジュバントなどの創薬が激しい勢いで進化していたのは今では周知の事実である。将来はがんやアレルギー、各種免疫「関連」疾患に対する先制医療の一翼を担うと考えられている。

本セミナーではSARS-CoV2に対するmRNAワクチン、免疫核酸医薬による免疫療法、細胞外核酸による免疫制御機構やその新規計測システムなど、我々の研究室の新たな知見を発表したい。

ラボHP <https://vaccine-science.ims.u-tokyo.ac.jp/>

司会の言葉



東海大学医学部 内科学系
腎内分泌代謝内科 教授

フカガワ マサフミ
深川 雅史



主な研究領域

慢性腎臓病、糖尿病性腎症、水電解質代謝異常、骨ミネラル代謝、尿毒症

主な著書

「やさしい腎臓病患者のためのリン・カルシウム代謝の自己管理～保存期・透析期から移植期まで～」(医薬ジャーナル社)
「レジデントのための腎臓病診療マニュアル 第3版」(医学書院)
「腎臓・水電解質コンサルタント 第2版」(金芳堂)
「透析患者の検査値の読み方 第4版」(日本メディカルセンター)

1983年 東京大学医学部医学科卒業
東京厚生年金病院内科、公立昭和病院腎臓内科勤務
1990年 東京大学医学部附属病院第一内科助手
1992年 米国バンダービルト大学リサーチフェロー
1995年 宮内庁侍従職、侍医
1997年 東京通信病院循環器科(腎臓内科)医師
2000年 神戸大学医学部附属病院助教授、代謝機能疾患治療部部長
2007年 神戸大学大学院医学研究科内科学講座腎臓内科学分野長、戦略的独立准教授、腎・血液浄化センター長
2009年 東海大学医学部内科学系腎内分泌代謝内科専任教授
2020年 東海大学内科学系長
2021年 東海大学医学部副学部長

午前の部の総論に続いて、午後の部では、最近話題になっている、頻度の高い感染症について各論をお話しいただき、総合的にディスカッションすることとした。

まず、小児領域における新興・再興ウイルス感染症について、次に、インフルエンザを中心に成人の呼吸器ウイルス感染症について解説していただく。これらのお話は、最新の知識の整理や確認に役立つであろう。

そしてメインは、COVID-19についてである。これまで2年間の経験からわかったことと、今後の展望を整理していただくことになっている。さらに、実際にCOVID-19に感染した経験を語っていただく機会も設けた。COVID-19感染も、軽症から、中等症、そして重症まですべてを診た方は多くはないと思われるので、それぞれのレベルでの症状変化とその対応について、知識を整理し、深めていただきたい。

ふたたび冬を迎えて、日常臨床でウイルス感染症への対応にお役に立てれば幸いである。

小児領域における新興・再興ウイルス感染症



新潟大学大学院医歯学総合研究科
小児科学分野 教授

サイトウ アキヒコ
齋藤 昭彦



主な研究領域

小児のウイルス感染症（特にパレコウイルスA3感染症、伝播、予防）、小児の予防接種など

主な著書

「ネルソン小児感染症治療ガイド 第2版」（医学書院）
「予防接種の手びき〈2020-21年度版〉」（近代出版）
「子どもの予防接種」（診断と治療社）
「小児感染免疫学」（朝倉書店）
「ワクチン：基礎から臨床まで」（朝倉書店）

1991年 新潟大学医学部卒業
聖路加国際病院小児科レジデント
1995年 Harbor UCLA メディカルセンターアレ
ルギー臨床免疫部門リサーチフェロー
1997年 南カルフォルニア大学（USC）小児科
レジデント
2000年 カルフォルニア大学サンディエゴ校
（UCSD）小児感染症科クリニカルフェロー
2004年 UCSD Assistant Professor
2008年 国立成育医療研究センター内科系専門
診療部感染症科医長（その後、感染防
御対策室室長、ワクチンセンター長を
併任）
2009年 東邦大学医学部客員教授
2011年 新潟大学大学院医歯学総合研究科小児
科学分野教授（現職）
2019年 UCSD Associate Professor
2020年 新潟大学医学部副医学部長

新興感染症（Emerging Infectious Diseases）の脅威は、最近の新型コロナウイルス感染症（Coronavirus Disease 2019, COVID-19）の世界的大流行に代表されるように、社会的なインパクトは極めて大きい。新興感染症は、多くのヒトが免疫を持たず、誰もが感染するリスクを持ち、地域や国をこえ世界中に広がる可能性がある。一方で、再興感染症（Re-emerging Infectious Diseases）は、既に認知されていたものの近年再び流行し、問題となっている感染症で、近年は新興・再興感染症の中でも、特にウイルス感染症の報告が多い。

同じ感染症でも小児と成人ではその病態が異なることがある。COVID-19においても、この2年間で、小児患者は人口比に比べ少ないこと、重症化のリスクは低いことが分かってきたが、感染後、小児に独特の合併症である多系統炎症性症候群（Multisystem Inflammatory Syndrome in Children, MIC-C）の報告や、新しい変異ウイルス（デルタ株など）による患者数の増加により、重症例の報告も増加している。小児領域において、新興感染症であるパレコウイルスA3感染症は、新生児、早期乳児に限り敗血症や髄膜脳炎などの重症感染症をきたし、再興感染症であるエンテロウイルスD68感染症は、特に小児で喘息様の呼吸器症状や予後不良の急性弛緩性麻痺をきたすことが報告されている。小児への新興・再興感染症の脅威は、今後も継続することが考えられる。

本講演では、近年小児領域で問題となっている新興・再興ウイルス感染症の中でも、COVID-19、パレコウイルスA3感染症、エンテロウイルスD68感染症の病態生理や診療について最新の知見を含めて議論したい。

成人の呼吸器ウイルス感染症 ～インフルエンザを中心に



倉敷中央病院 呼吸器内科 主任部長／副院長

イシダ タダシ
石田 直



主な研究領域

呼吸器感染症

主な著書

「呼吸器診療スキルアップ」(CBR)
編著「胸部画像診断:感染症を読む」(丸善出版)
分担執筆「Influenza」(Springer)
分担執筆「Aspiration pneumonia」(Springer)
編著「呼吸器病レジデントマニュアル第6版」
(医学書院)

1984年 京都大学医学部卒業
京都大学胸部疾患研究所第1内科(現
呼吸器内科)入局
1985年 国立姫路病院内科赴任
1988年 倉敷中央病院内科赴任
1996年 京都大学医学博士取得
2000年 同呼吸器内科主任部長
2004年～京都大学臨床教授
2020年～倉敷中央病院副院長兼呼吸器内科主任
部長

成人に呼吸器感染症を惹起するウイルス性疾患は数多くあるが、なかでもインフルエンザは、冬季に流行を起こす代表的な疾患である。2020年のCOVID-19のパンデミック以降、本邦でのインフルエンザ発症例の報告は激減しているが、亜熱帯地域では現在でも小流行がみられており、今後ウイルスが国内に持ち込まれると、大きな流行を起こす可能性がある。また、将来的に、鳥インフルエンザからの新型インフルエンザ発生も危惧されている。

インフルエンザは、自然寛解することも多い疾患であるが、高齢者や幼児、妊婦、基礎疾患を有する人では、罹患後の合併症のリスクが高い。一方、健康なリスクのない人でも、時に重症化することが認められる。ワクチンはインフルエンザ予防の基本であるが、ウイルスの型や年次により有効性に差がみられる。抗インフルエンザ薬は、症状の軽減と重症化予防に有用であり、罹患後早期に使用することが望ましい。本邦では、早期診断および早期治療の方針が普及しており、現在5種類の抗インフルエンザ薬が使用可能であり、治療の場や病態に応じて使い分けが行われる。

新型コロナウイルス 感染症COVID-19とは



国立国際医療研究センター
国際感染症センター
センター長

オオマガリ ノリ オ
大曲 貴夫



主な研究領域

臨床感染症

主な著書

「感染症診療のロジック」(南山堂)

- 1997年 佐賀医大医学部卒業
聖路加国際病院内科レジデント
- 2002年 テキサス大学ヒューストン校内科感染症科クリニカルフェロー
- 2004年 静岡県立静岡がんセンター感染症科医長
- 2007年 同部長
- 2011年 国立国際医療研究センター国際疾病センター副センター長
- 2012年 同院国際感染症センター長
- 2017年 国立国際医療研究センター病院AMR臨床リファレンスセンター長(兼任)

新型コロナウイルス感染症は、2019年12月に中国の武漢市で初めて患者が報告され、新型のコロナウイルスが病原体であることが確認された。患者から検出されたコロナウイルス SARS CoV-2と呼ばれるようになり、WHOは本ウイルスによる感染症の呼称をCoronavirus Disease 2019 (COVID-19) と決定した。COVID-19では多くの場合は咽頭痛は微熱などの軽い風邪の症状が1週間程度続いた後徐々に軽快していく。しかし一部の患者では発症後1週間前後から咳や高熱が出始め、肺炎を起こす。甚だしい場合には進行性の呼吸不全を来し、人工呼吸や膜型人工肺による治療必要になる場合がある。レムデシビルはRNAウイルスに対し広く活性を示すRNA依存性RNAポリメラーゼ阻害薬である。アメリカ国立衛生研究所が主導する国際共同研究として実施され、臨床的改善に要した時間が5日間短縮することが示され、2020年5月7日に国内で特例承認制度に基づき薬事承認された。COVID-19の重症化の機序として、疾患の進行の過程でウイルスの過度の増殖の結果肺胞上皮細胞等が感染して感染した細胞の壊死が進行して様々な物質が体内に放出され、これを刺激として免疫系の調整不全が起こってサイトカインの異常放出が起こり、結果として全身で細胞障害が進行することが考えられている。この過程に介入するための治療として免疫調整薬としてデキサメサゾン、バリシチニブが日本でも認可され用いられている。また、発症後早期の軽症～中等症Ⅰのハイリスク例の重症化を防ぐために抗体カクテルが利用されるようになった。

特別発言「コロナに感染して変わった事～悪い事ばかりじゃない!?～」



振付師、タレント

スズキ
パパイヤ鈴木



主な著書

「パパイヤ鈴木 の作り方」(ザ・テレビジョン文庫)
「デブでした。」(RHブックス・プラス)
「カズミくん」(汐留イノベーションスタジアム)

経歴

1966年6月29日生 振付師・タレント
16歳でダンサーとしてデビューし、東京ディズニーランドを最後に振付師になる。
1986年、CBSソニー(現ソニーミュージックエンタテインメント)で振付、タップダンスのインストラクターを務め、1998年にパパイヤ鈴木とおやじダンサーズを結成。
2018年に結成20周年を迎えた。
振付け代表作品は、AKB48「恋するフォーチュンクッキー」、ロッテ「Fit's」CM、スズキ「ソリオ」CM等。

僕の座右の銘は「人生プラスマイナスゼロ」です。全てのモノに「陽」と「陰」が半分ずつある。だから、どんなに困難な状況でも、どこかに必ず「プラスがある!」と信じて生きてきました。今回、コロナに感染をして、さすがに「プラスは無いかな」と思いました。

しかし…

6月初め、微熱がありました。まったく危機感はなく、「風邪かな?」くらいに思っていました。僕は体調が悪くなると、いつも熱が出て2日くらいで引くタイプなのです。「いつものアレか…」と思ったのですが、4、5日熱が下がりませんでした。39度近くあって、なかなか下がらず…、でも2回ほど、36.5度くらいまで下がりました。理由は今でも分かりません。一時的に下がっても1時間くらいすると、また熱は上がりました。「これは尋常じゃないな」とも思いましたが、「コロナじゃないかも」「熱が下がったら仕事ができるかも」「迷惑をかけないで済むかも」という気持ちが勝ち、まずは家族から自分を隔離し、様子をみました。ですが、状態は改善しなかった為、自宅近くの発熱外来を探し、インターネットで予約をしてPCR検査を受診しました。

翌日、保健所から「コロナに感染しています」と告げられました。発熱から約1週間後のことでした。目の前が真っ暗になりましたね。まず頭に浮かんだのは、「みんなに迷惑をかけてしまう」という事でした。仕事は全てキャンセル。最悪の事態になってしまいました。翌日から二週間の入院。先生方は、僕が重症化しないように最善を尽くしてくれました。本当に感謝しています。

そして二週間後、最後の血液検査が終わり、検査結果に僕はびっくりしてしまいました。検査の数値が良く、体重も10キロ以上減っていました。僕はコロナに感染する前より、健康な身体になっていたのです。退院後、僕の生活は一変しました。何が変わったのか? 全てお話ししますね。やはり、「人生プラスマイナスゼロ」でしたよ。

生命をテーマに未来と語りたい。

私たちは医療の分野を担う企業人として、
これまでも医薬品や臨床検査薬などの研究・開発に携わってまいりました。
私たちの製品が医療の新しい可能性を拓くことのお役に立てたとすれば
それは全社員の大きな喜びでございます。
今後も未来の分野にチャレンジし続ける企業でありたいと考えております。
また、そのような企業姿勢は社名にも反映されています。
REBIO＝レビオとは、
RE（蘇生）とBIO（生命）の2つの言葉を組み合わせた、
「生命の蘇生を願う」私たちの夢を象徴するものです。
医師や検査技師の先生方のよきパートナーとなり、
かけがえのない生命の蘇生に貢献するために、
私たち富士レビオ・グループはさらに努力を続けてまいります。
これからも一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

—新しい価値の創造を通じて世界の医療に貢献します—



メディコピア教育講演シンポジウム

富士レビオ株式会社は1981年（昭和56年）より、メディコピア教育講演シンポジウムを主催してまいりました。これからも、継続して開催していきたいと考えております。今まで開催いたしましたシンポジウムのテーマは下記のとおりです。今後の希望するテーマやご意見を、同封のアンケート用紙によりお聞かせ下さい。なお、メディコピア教育講演シンポジウムは、毎年1月に開催いたします。

第 1 回	1981.1	新しい免疫学への招待
第 2 回	1982.1	癌は制圧できるか
第 3 回	1983.1	免疫遺伝子の応用と将来
第 4 回	1984.1	人間はどこまで生きられるか
第 5 回	1985.1	食物の昔・今・未来
第 6 回	1986.1	こころと医療情報へのアプローチ
第 7 回	1987.1	風族病—その背景
第 8 回	1988.1	老人性痴呆は防げるか
第 9 回	1989.1	スポーツと健康
第10 回	1990.1	住居と健康と病気
第11 回	1991.1	気象病と季節病
第12 回	1992.1	痛みの科学
第13 回	1993.1	身近な遺伝学
第14 回	1994.1	航空医学と宇宙医学
第15 回	1995.1	脳はどこまでわかるか
第16 回	1996.1	心筋梗塞はなぜおこる
第17 回	1997.1	忍びよる糖尿病
第18 回	1998.1	遺伝子医療
第19 回	1999.1	骨と健康
第20 回	2000.1	生命の科学
第21 回	2001.1	肥満
第22 回	2002.1	話題の感染症
第23 回	2003.1	高齢者と医療
第24 回	2004.1	メンタルヘルス
第25 回	2005.1	アレルギーと関節リウマチ
第26 回	2006.1	食物と健康
第27 回	2007.1	21世紀の対がん戦略
第28 回	2008.1	睡眠と健康
第29 回	2009.1	インフルエンザの最前線
第30 回	2010.1	動脈硬化をめぐって
第31 回	2011.1	腎臓病
第32 回	2012.1	血液の病気
第33 回	2013.1	肝臓の病気
第34 回	2014.1	栄養と食欲
第35 回	2015.1	転換期の高齢者医療
第36 回	2016.1	がん診療はこう変わった
第37 回	2017.1	糖尿病診療の未来
第38 回	2018.1	認知症
第39 回	2019.1	変わりつつあるアレルギー疾患の考え方
第40 回	2020.1	医療におけるAIの役割と未来
第41 回	2021.1	がんゲノム医療の最前線
第42 回	2022.1	ウイルスを知る

MEMO



Handwriting practice lines consisting of 20 horizontal dotted lines.



メディコピア教育講演シンポジウム実行委員会

〒163-0410 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング